In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	「菅原伝授手習鑑比叡山の段」(文楽軒旧蔵本)解題と翻刻
Author	久堀, 裕朗
Citation	文学史研究. 59 巻, p.68-74.
Issue Date	2019-03-30
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

（『文学史研究』59号　2019. 3）

「菅原伝授手習鑑　比叡山の段」（文楽軒旧蔵本）解題と翻刻

久堀裕朗

かつて『上方文化講座　菅原伝授手習鑑』（和泉書院、二〇〇九年）の中で、『菅原伝授手習鑑』の増補物をいくつか紹介し、「『菅原伝授手習鑑』増補上演年表」をまとめたが、その際には見出していなかった新出の一本「菅原伝授手習鑑　比叡山の段」（山田案山子作、文楽軒旧蔵）をここに紹介し、同年表を補足することにしたい。翻刻凡例や以下の記載形式は、『上方文化講座　菅原伝授手習鑑』所収「『菅原伝授手習鑑』増補物　解題と翻刻」に準ずるので、併せて同書を参照されたい。但し、この新出写本に見られる本文改訂の書き入れをどのように翻刻に反映したかについては、以下の【成立・備考】の欄に記した。

【底本】大阪市立大学学術情報総合センター　R711.1/Y19/1591/国文学

【書誌】六行写本。全二十二丁。「新作／菅原伝授手習鑑／四廼中書入／比叡山之段」（前表紙）。内題「比叡山の段　第四の中書入」。「天保十二辛丑九月吉日／作者山田案山子／筆工松廼家真鶴」（終丁末）。「文楽軒蔵」（後表紙）。

【内容】「四廼中書入」とある通り、四段目の中（原作では北嵯峨の段）の代わりに挿入するべき内容である。「比叡山の段」とあるが、二場に分かれており、前半は「帷子の辻」、後半が「比叡山」である。

〈帷子の辻〉菅丞相の御台所は、桜丸の女房八重とともに嵯峨野に隠れ住んでいたが、敵に住家を探し出され、帷子の辻堂まで逃れてくる。追ってきた敵の捕り手との戦いで八重は命を落とす。左中弁希世と星坂源吾が現れ、後に残った御台所を連れて行こうとするが、そこに桜丸夫婦の幽霊が現れて二人を懲らしめる。幽霊が消えた後、正体不明の山伏が御台所を抱えて走り去る。

〈比叡山〉比叡山の法性坊阿闍梨は、師檀関係にある菅丞相が配所で亡くなったと聞き、庵に籠もって悲嘆に暮れている。弟子の業因坊は密かに藤原時平に通じており、菅丞相に対する悪口を言うが、法性坊は取り合わない。夜更けて菅丞相の霊が束帯姿で庵の外に現れる。菅丞相は法性坊に、「内裏に天変が起こり、帝に召されることがあっても、決して参内してはならない」と言う。法性坊が「二度までは辞退するが、勅使が三度に及べば参内する」と答えると、菅丞相は怒って柘榴の実を口に含み、妻戸に吐きかける。すると猛火となって、戸が燃える。様子を窺っていた業因坊が菅丞相に斬りかかるが、たちまち

体を裂かれて絶命する。法性坊が数珠を押しもみ、印を結ぶと、菅丞相の霊は消えていく。

【成立・備考】天保十二年（一八四一）九月、稲荷社内東芝居初演。番付には「叡山の段」と記されており、太夫は竹本越太夫である。また人形は、吉田金四が菅丞相・松王丸・桜丸・八重の四役を「出遣ひ早がわり」にてつとめる旨が記されているが、これは「帷子の辻」の場面の役割に相当するということになる。この増補段の作者については、番付にも「添削　山田案山子」と名前が挙がっているが、今回紹介する写本によっても山田案山子であることが確認できる。

当写本は、後表紙に「文楽軒蔵」とあるように、文楽の芝居（文楽座）の座主のもとに伝えられた本である。そして興味深いことに、この写本の本文には二段階の改訂が加えられており、その第二段階の改訂は四代目文楽軒（文楽翁、円成院の墓碑では三代目）によるものと思われる。この点について、以下に説明を加えたい。

当写本には、所々に貼り紙による本文の改訂がなされており、それには朱筆の改訂と、黒い細字（さいじ）の改訂の二種類が認められる。二段階の改訂が加えられたものと推測されるが、朱筆改訂箇所の上に貼り紙し、再度黒い細字で改訂された箇所があるので、朱筆が第一段階、黒い細字が第二段階であることがわかる。そして、その黒い細字の文字は、前掲書に紹介した文楽翁自筆稿本「菅原伝授手習鑑　北嵯峨別業の段」と同筆であると認められるので、この第二段階の改訂は文楽翁によるものと推定できる。

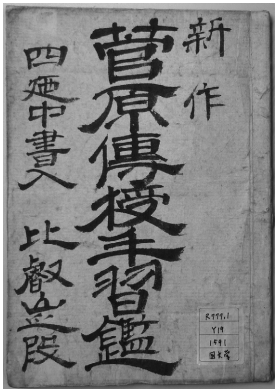
本段は天保十二年の初演の後、江戸時代には再演されず、明治十三年（一八八〇）五月、松島文楽座の『菅原伝授手習鑑』興行時に、「比叡山柘榴天神の段」として復活している。この興行で文楽翁はいくつかの段を新作増補しているが、それらとともに当写本の後半「比叡山」に改訂を加え、「比叡山柘榴天神の段」として上演したものと思われる。そのことは、現存する「比叡山柘榴天神の段」写本（大阪市立中央図書館蔵、清六４９１）と当写本の文楽翁改訂本文が一致することからも裏付けられよう。当段は以後、明治四十二年に至るまで、文楽座の『菅原伝授手習鑑』興行で繰り返し上演された。（なお明治三十年三月、御霊文楽座『菅原伝授手習鑑』興行に段名の見える「帷子ヶ辻の段」を、増補上演年表では初出としたが、これは当写本の前半「帷子の辻」の再演ということになるだろう。）

一方、第一段階の朱筆修正については、どの時点でなされたのか不明であるが、本段が明治十三年までは再演されていないことを考えると、既に初演前後になされていたと判断してよいように思われる。当写本は座で保管するための浄書本（筆者の「松廼家真鶴」は未詳）と推定されるが、再演に備え、初演前後のある段階で、実際の上演本文を反映させた修正を、浄書本文に朱筆で加えたものと思われるのである。

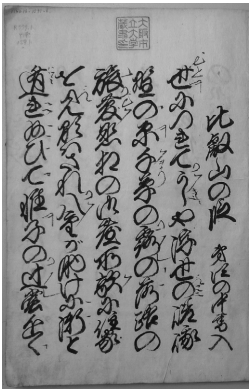
以上、当写本においては、この二段階の改訂が重要なので、どのように改訂されているのかがわかるように、以下の翻刻に反映した。すなわち、貼り紙で隠されている元の本文を【　】で括り、その紙の上に改訂本文が記されている場合、【　】の後に続けて、朱筆の改訂は〈　〉で括って記し、黒い細字（文楽翁）の改訂は〔　〕で括って記した。例えば、「【とは云ながら。】〔夫レはそふと〕」とある場合、元の本文は「とは云ながら。」で、その上に貼り紙をし、黒い細字で「夫レはそふと」と貼り紙に書いてあるという意味である。また、朱筆の

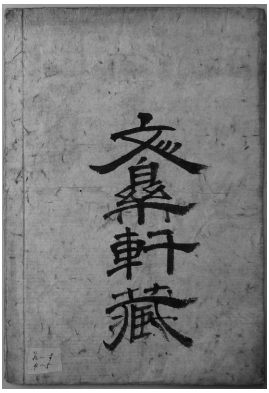
場合は、貼り紙をせずに、朱線で本文を消して横に改訂本文を記していることもある。そのような場合は、例えば「お前〈あなた〉」と記し、「お前」（元の本文）を消し、朱筆で「あなた」に改めているということを示した。傍線がなく、例えば「聞へしは〈海内知識の聖なり〉菅丞相と師壇の睦び」と記している部分は、単に「聞へしは」と「菅丞相」の間に入るべき文章を朱筆で補っているという意味である。

【付記】本稿は、ＪＳＰＳ科研費（課題番号 15K02254）の研究成果の一部である。

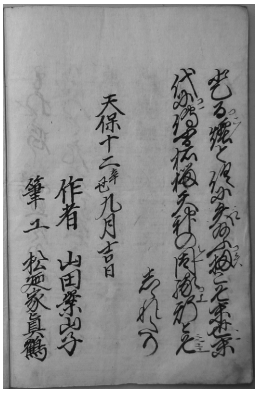


前表紙

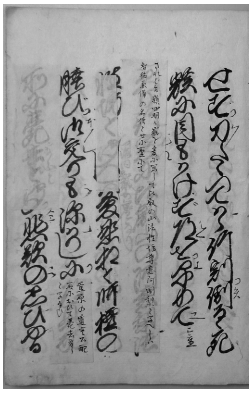

本文冒頭（1オ）



後表紙



本文末（22ウ）


文楽翁改訂部分（13オ）

新作
菅原伝授手習鑑
四廼中書入　比叡山之段（前表紙）

比叡山の段　第四の中書入

地色中世につれて。ウキンうしや浮世のハル嵯峨野の中原ウヲクリ千草の。フシ露の落路の旅。

地ウ菅丞相の御台所ウ敵に住家をハル見顕はされ。ウ八重が助けに漸とハツミ遁れ給ひて帷中子の。フシ辻堂近く（1オ）着給ふ。

地ウ八重は討手の大勢を。ウ切払ふ身も数ヶ所の手疵。ウ刀を杖に中立留り。「詞ア、嬉しや。漸爰まで落延し。イヤ申御台様。暫く爰にてお休下さりませ」と。地ハル云つゝ御台の御顔を。ウ打入守り中〳〵。「ウ世が代にて（1ウ）ましまさばあらい風にも当ぬ身を。表具カ、リいかに時代のならひとてハルなれぬ入歩路の御艱難。ウ是非もなき世」と計にて。ウ我身の手疵は苦にも中せす。ウ主をいたはる真実心。ウ御台も心根思ひやり。ウ主従（2オ）手に手をクル取かはし中ハルフシ尽ぬ。涙ぞ哀なり。

地ハル八重は心を色取直し。「詞ア、泣て居る所でなし。是より北山芹生の里。武部源蔵殿の方へ尋行。御身を忍びおはしませ。譬敵が追かくる共。わたしは爰に待うけて。（2ウ）討手の者を切ちらし。跡より追付申べし。地中ウ敵の来ぬ間に一足も。フシ早落給へ」とすゝむる所へ。

地ウ又も聞ゆるハル人声物音。「ウ見付られては叶はじ」と中見廻す傍へのハル辻堂へ。ウ御台を忍ばす間もなく。ウ早かけ（3オ）来る色捕手共。「詞ノルヤア女め。菅丞相の御台何国へ埋んだ真直に。白状ひろげ」とフシ呼はつたり。

「詞ノリヤア愚〳〵。女なれ共桜丸が女房八重。息有内はいつかな〳〵。御主人の御台所様。そちら如きに渡さふか。」「地色ウヤア物ないは（3ウ）せそ討取」と。ハル一度にかゝるつばなの中穂先。ウ手負ながらも右左。ハル前後を払ふ手練の太刀風トル爰をせんどゝ三重へ戦ひしが。地ウさしもの大勢あしらひ兼。ハル皆我一と逃中ちつたり。ウ八重も以前に弥増手疵フシウント（4オ）のつけに倒れ伏。

地ウ物音聞つけハル御台所。ウ走寄て。「詞コレ八重いのふ。〳〵。ヱヽどふぞ水がな。ヲヽ幸」と。地ハル井地の流をむ中すび上。ハル口にふくませ耳に口。「詞八重いのふ。コレ気を慥に持てたもいのふ」と。地ハル呼生給ふ御（4ウ）声の。ウ耳に通じて色目をひらき。「詞ア、御台様。御身にお怪我はなかりしかア、。地ハル嬉入しや」と云声も。ウ早たへ〴〵の断中末魔。ハル御台は悲しく入抱かゝへ。「詞コレ気をしつかりと張詰て。必死でたもんなや。地色ハル行先迚も敵の中。ウそな（5オ）たに別れ入キン自は。ウ跡に残つて何とせふ。ウ斯迄尽し不運の末。ウいつそ此身も入死たい」と中ノルフシ世を恨みたる御悔。

「詞ヲヽお道理でござります。御尤でござりますはいな。力と思ふ私は。所詮叶はぬ此深手。逆様（5ウ）な介抱受る。カ、リ此身の冥加恐しい。地ハル死る我身は惜まねど。ウせめて御先途中見とげる迄。色生て居たい。ヱヽ死とむない」と。ハル忠義一図の女気も。ウ早せぐりくる一世の瀬戸。矢惜やさしもの忠臣烈女。フシ草葉（6オ）の露と。消にける。

地ハル御台はわつと取乱し。ウ跡や枕を押動かしスエテ前後不覚に。ハル泣

中給ふ。

ウか、る所へ【のつさ〳〵ウ時平が荷膽人左中弁希世】ハル星坂源五【を引連てハツミフシ辻堂近く出来り。地ハル夫と見るより「色扨こそ〳〵。】（6ウ）詞ノリ菅丞相の内証見付た〳〵。兼て北嵯峨に隠れ住よし。注進有て明白たり。我出合たが百年目。搦捕て時平公へ引立る。サア〳〵歩め」とフシ詰寄る。

「地色ウもふ是迄」とハル御台所。ウ用意の懐剣抜放し夫の仇（7オ）と突かくる。ウ其手を取て。「詞へ、ハ、ハ、、、、。【ヱ、】性にも合ぬ刃物ざんまい。じたばたしても【コリヤ】もふ叶はぬ【わい】。ソレ【星坂】引立よ」と地中下知の中。ウ情用捨もあらけなく。ハル小腕取て色引立る。ハル口惜涙詮方もフシカ、ル泣入給ふを。中ウ耳（7ウ）にもかけず。ハル引立行んとす中る所に。下コハリふしぎや俄に身の毛立。ウ主従共に五体しやきばり。ハル眼くらんで一時に。フシ其ま、そこへ倒れ伏。

地中キン雲や五運の結ぼれしハルかばねは。土にウ帰れ中共。ハル忠義にこりし色一念の。キン魂は此世に中帰り（8オ）咲下フシ舎人桜が立姿。

地ハル御台は夫と見るよりも。「詞ヤアわがみは桜丸。爰へはどふして〳〵」と。地ハルふしぎ晴ねば中顔を上。「詞ホ、御不審御尤。斎世の宮と姫君の。御媒を申せしが。讒者の種と情なや。丞相様は御流罪。申訳（8ウ）なく相果れど。我一念はいつかな〳〵。此世を去ず守護する某。追付悪人滅亡の。其有様を見せ奉らん。必御短慮なし給ふな。」と地ウ諫る中に気の付両人。ハル起上つて色見て恟り。「詞ヨウうぬは桜丸め。くたばつたと聞しに。（9オ）扨はへちまふてうせたな。邪魔せずと早なくなれ」と。地ウ双方一度にハル抜つれて。ウ切払ふたる打物の。ウ徳に恐れて亡霊の。フシ形は雰と消にける。

「詞ヱ、さま〴〵のやつがうせおつて。思ひの外の隙取」と。地中謡き〳〵主（9ウ）従が。ウ行んとすれど引戻され。ウ思はず跡へたぢ〳〵〳〵。フシ途方にくれて居たりける。

地中キン風物すごく中吹つれて。ツ、ミ歌枯し尾花の中ウ袖袂。キン闇浮に帰るウ八重が中姿。フシ影の如くに。ウ顕はれたり。

地ハル希世は見るより。「詞ヤア〳〵〳〵。桜丸が女房（10オ）八重。扨は儕もくたばつたな。ハ、ア扨は女夫連の幽霊か。ヱ、うぬも早く消ろ」と。地ウ太刀を抜んと手をかくれど。ウ更に抜ねば「色コリヤどふしや。詞油断致すな星坂」と。地ウ主従気をばハル張弓のウ矢猛心に行んとする。ウ向ふにすつ（10ウ）くりハル桜丸。「色コリヤ叶はぬ」と中引かへせば。ハルこなたに八重が中ウ魂魄の上キン互にかげろふ水の月色見へつ合。上隠れつ幻中に合。ウ死霊の通力ハル両人は。ウ心も足も地に付ず。ウ只真青に逃行希中世。ウ源五は五体ふり廻はされ。（11オ）フシ尻持どつさり大臼形。

地色ハル桜丸色につこと笑ひ。「詞イヤ申御台様。必気遣ひ遊ばすな。猶此上は影身に付添。御身を堅固に守奉らん。地色ハル早おさらば」と夕風の。ウ松のこたまに音かへてフシ形は。きへて失にけり。

地ウ小影に始終（11ウ）窺ふ山伏。ウこなたに倒れし星坂源五。ハル起上つて色傍りを見廻し。「詞ヱ、一度ならず二度ならず。いま〳〵しい幽霊め。しかし肝心の御台は。ヤそこにお越か。ヲツトどつこいしよ。おのしを逃してコレマよい物かいやい。（12オ）そさまさへ手に入ば。しめこじや〳〵。サアこい」と。地ハル御台所を引立る。ウ後の方よりハル星坂が。ウゑり髪つかんで真逆様。ウ驚く御台を手ばしかく。ウ弓

手にかゝへ立中上れば。ウ我武者の星坂ハル大だら引抜。ウ切てかゝるを事共（12ウ）せず。ウ刀たくつてから竹割。矢倒るゝ死骸に目もかけず色道を上早めて三重

【へ欠り行。

地ハル爰に比叡山の阿奢梨法性坊と中聞へしは〈海内知職の聖なり〉【〔されば台嶺四明が嶽を爰に写して比叡の山法性坊尊意阿闍梨と聞へしは智徳兼備の名僧と世に聖にて〕ウ菅丞相と師檀の睦び。本フシ御交りも深かりしに。【道真配所に薨去と〈シ給ふと〉聞。】〔菅原の道実公配所におひて薨去有しと聞給ひ〕スエ悲歎の思ひ中やる（13オ）方なく。フシハル寺務をも捨し草の中庵。フシ無常を観じおはします。地ウ藪にも曲れるいばら弟子【ウ悪僧の】〔奥歯に針の〕業因坊。ハル兼て時平に【一味の】〔荷擔の〕悪念フシ心に隠しウ実体顔。

「詞イヤ申師の御坊。こなた様は一山の将職。殊に天子の（13ウ）祈の師と。人も敬ふ身を持ながら。菅丞相の死去と聞し。其日より本坊を捨て。此山中の庵り住居はマア何事ぞ。朝敵謀反の菅丞相が。後世仏果を弔ふお心か。そりやお前〈あなた〉大けなひが事で（14オ）ござります。イヤサ天子に背きし菅丞相。ソレ今頃は地獄の釜こげ。どの様に跡弔ふても。成仏なんどはイヤハヤ思ひも寄ず。役にも立ぬ気骨折ずと。是からは時平公の館【へ立入。】〔へも御ン入有て〕身の活計をお極め有が。イヤサ（14ウ）【徳と申者じや」と。地ウ己が曲りし根性】〔先第一あなたのお徳と申物でござりまするヱヘ、、、、」と追従も己が曲みし根性〕にウ引くらべたる無常の詞。ハル耳にもかけず色袖打払ひ。「詞ア、かしましし〳〵。善悪不二と聞時は。何れを善し。何れを悪（ニク）まん。され共肉体凡夫の目からは。地ウ影澄登る月かげの。ハル光を（15オ）覆ふむら雲をウ払ふ風こそ待るゝな中らひ。不義の富貴は浮雲の如し。ハル聞さへ耳の色穢らはしい。詞只戒定会の三学こそ。濁りを洗ふ霊水なれ。地色ウ多言無益」とハル云放ち。ウ御座を立てしづ〳〵とフシ一間の。内へぞ入給ふ。（15ウ）

地ウ跡見送つて業因坊ハルくい違ふたる色仏頂づら。「詞ヱ、片意地な師の坊。師匠を師匠と思へばこそ。身に徳の付異見もすれ。夫にマア何じややら。ちんぷんかん。とけつかるはいムハ、、、、。ア、儘よ。どふなとせい。シカシ今夜は（16オ）どふやら気味たの悪い晩じやガ。どこぞ明ィてはないか。ヲ、こりやコレ柴の戸が明て有はい。ドレ〳〵しめて置ふ。斯しめて置ばマア用心もよし。ア、何に付ても此。業因坊様はヤ白鼠じやはい。夫に引かへ欲しら（16ウ）ずの師匠。思へば〳〵いま〳〵しい。【とは云ながら。】〔夫レはそふと〕筑紫の国へ流されし。彼菅丞相がなくなれば。【世は時平公のしたい儘。】〔何事も一ト片付左府公を始メ一味の人も先ッ安堵〕追付天皇を追下ケて。時平公は十善の位。そこで指詰此業因も。天台の阿奢梨様とは。（17オ）コリヤ有がたいじやないかいな。アハ、、、ヲホ、、、、。ア、出世の小口がヤ開きかけたわい。」と地ハル欲と悪との独言。フシ舌なめずりして【入にけり。

地ハル峰にたなびく。】〔業因坊勝手の方に入にけり　山の端洩るゝ月代や峰にたなびく〕中白雲の夫かあらぬか。ウ忽中然と。キン顕はれ給ふ菅丞下相有しながらのウ束帯姿。しづ（17ウ）〳〵ウ扉に。フシ立寄給ひ。「詞師の坊やおはする。道真こそ拝顔の為参りたれ。地ウ爰明給へ」と中音なへど。いらへなければハル立退て。キン御身をウゆルがせ。フシハル

庵りの内へぞ入給ふ。

地ウ師弟の縁の中通じてや。一間を出る法性坊。ハル夫と見るより（18オ）色打驚き。「詞コハ思ひ寄ずや道真公。正しく御身〈君〉は配所にて。薨じ給ふと人の噂。是といふも讒者の業。何卒無実の虚名をすゝぎ参らせんと。心魂を砕きしかひもなく。去によつて。此庵室に曳籠り。せめては御身の（18ウ）後世善所を。ひたすら祈参らせしに。思ひがけなき今の対面。先々是へ」とフシ有ければ。

地ハル丞相席に色着給ひ。「詞ア、おろか也師の御坊。身不肖なれ共当今に。尽す忠義は時の間も。怠る事もなかりしに。地中情なや讒者の舌頭（19オ）にウ欺かれ中給ひ。ハル科なき我をはる〴〵と。表具ハル心つくしの入島守と。ウなさせ給ふは。【キン恐中れながらハル名君の】〈名玉の曇りおふひし〉御中僻事。【詞夫に付ても讒者の輩一々に。天罪の程】〈それしも恨らみ奉らずそれに付ても逆臣原我を罪して朝廷をかたふけんとする讒者の輩一々に天罰の程〉思ひしらすべし。今より五日ッの後。内裏に天変の事有て。御坊を召るゝ勅（19ウ）使来たる共。必参内なし給ふな。是迄師檀のよしみを思ひ。此義を頼参らせん為。今宵わざ〳〵地ウ参向せり。」とハル宣ふかんばせキンつく〴〵と打中詠め。「詞扨は一念の神霊にて。讒者を罰し給はんとや。いかにも禁庭より勅使下し給ふ共。（20オ）二度迄は辞退し。参内は仕るまじ。ガ。勅使三度に及びなは。力なく参内致すべし。其時必恨給ふな。先々是は山中の木生の柘榴。さもしくと是を菓子とし。渋茶一腹きこし召」と。地ウ他事なき師匠の饗応を。ハル余所に（20ウ）聞なし「色いやとよ。詞譬勅使三度に及ぶ共。我に誠の心あらば参内をとゞまり給へ。」「いな〳〵。丞相の詞共覚へず。師檀の契りは内証。違勅の科は犯しがたし。此義計は赦し給へ」と。地ウ宣ふ中に菅丞相。ハル面色変ずる怒りの相恰。ウ逆立（21オ）しんゐ御中傍の。ウ柘榴を取て噛砕き。ウ妻戸にばつと中吐かけ給へば合。ウ忽猛火とハル鳴神の。轟く響き諸共に。色戸はゑん〳〵と。ウフシ燃立たり。

地ウ後に窺ふ業因坊。道真〈相丞〉目がけ戒刀ふり上。ウ切てかゝれば立ずくみ。ウ我と我手に中頭転倒。ハルたをるゝ間（21ウ）も色あら恐し。下コハリ両足空に成よと見へしが。ウさつと左右へ引裂れ。フシ二つになつて死てんげり。

地ハル僧正騒ぐ気中色もなく。ウ数珠押もんで瀉水の印結と給へばさしもの猛火。ぱつときへたる煙の内。今迄有し菅丞相。姿は空にハルたち（22オ）登る。ウ煙と倶にハル失給ふ。矢扨こそ末世末代に。伝ふる柘榴天神の色因縁。上斯とそしられたり

天保十二辛丑九月吉日

作者　山田案山子

筆工　松廼家真鶴（22ウ）

文楽軒蔵（後表紙）

（くぼり　ひろあき・大阪市立大学大学院文学研究科教授）